幼児期の人間関係形成過程に関する一考察
―「巣と群れ」という視点から ―

柴　田　長　生

1　はじめに

人は、生まれた時からひとりでは生きていけない。否応なしに他者との関係の中で順次発達を遂げていくのが人間である。他者を前提とするその時々の人間関係は、発達を遂げる乳幼児の生活世界そのものであり、他者との関係の中で徐々に「私」を形成していく（浜田、1992）。

子どもの成長過程として、これらの育ちの道筋を実現していくために、乳幼児の生活世界の中では様々な営みが日々行われる。しかしこれらは単純に「個別の人間関係の成立から、集団内での社会的人間関係の成立へ」といった単線的なものではなく、一対一の基本的な人間関係と集団をめざした人間関係は、早い段階から輻輳する。そして両者が関与しあう複合的な人間関係成長のプロセスによって、乳幼児の人間関係が総合的に形成されると考える。本稿では、子どもの生活世界の中で展開されている人間関係の複合的・総合的なプロセスについて、以下に述べる「巣と群れ」という枠組みから、先行研究を援用しながらまず考察する。

乳幼児の成長を支援する保育者は、日々の生活を共にしながら、子どもの生活世界の中で展開されている人間関係の複合的・総合的なプロセスに沿って子どもに関与し、日々の関わりを通して子どもの成長を評価する。筆者は、子どもの社会生活能力を評価するために「社会生活能力目安表」（以下、目安表）を作成した（柴田、2006 : 2013 : 2014）。そして、評価尺度の内容や配列を見直すために、保育所保育士に目安表を使った担当乳幼児の評価を新たに依頼したが（柴田、2017）、ある年齢区間の乳幼児に対する保育士による評価、とりわけ集団参加に関する評価がかなり高くなるという結果が認められた。そして過大評価ではないかとも思われた、集団参加に関して高評価となる年齢区間は、先行研究で指摘された子どもの人間関係の変化時期と重なっていた。本稿では、子どもの生活世界の中で展開されている人間関係の複合的・総合的なプロセスを、上に述べた保育士による集団参加領域の評価傾向や評価結果から検討・考察し、子どもの生活世界における援助者である保育士が特定の年齢区間で高評価となってしまうことの意味や、子どもの対人関係を育む保育士のあり方についても言及する。

2 「巣と群れ」という枠組みについて

はじめに、子どもにおける人間関係の発達を大づかみに述べてみよう。人は、個体としての成長・成熟を遂げながら（intra personal）、一方で乳児期における「愛着形成」、幼児期における「基本的な対人関係の成立」（安心基地が形成される）、学童期における「自他間での相互共感関係の成立」を獲得し（Ⅰ）、他方では乳

児期の「外界の成立」、幼児期の「遊び仲間の成立」、学童期以降の「関係集団・帰属集団・準拠集団の成立」へと向かっていく（Ⅱ）。

（Ⅰ）は対他的な（inter personal）な関係世界であり、特定の人間関係の元で、受け止められ安心基盤を形成しながら、自他関係の本質を育成させる場である。関係構造は求心的・接近的であり、これだけでは閉鎖的になる可能性もある。このような場を「巣」と呼ぶことにする。それに対して（Ⅱ）は社会内での（inner social）関係世界であり、様々な集団の中で、力関係・序列・準拠規範などに支配されながらも、集団に参与して時期に応じた社会性を醸成させる場であり、関係世界である。関係構造は遠心的であり、様々な距離化が生じる。またこれだけでは拡散・暴走・混沌などが生じる場合もある。このような場を「群れ」と呼ぶことにする。私たちは、これらの関係世界を往還しながら様々な対人関係を営み続け、その全体の中で少しずつ自我を形成し、社会性を獲得していく。

浜田（1992）は、子どもにおける自我形成過程を考察するにあたり、自他を区分する媒体である身体に着目し、両者にとって同じ類としての身体は、あらかじめ通じ合うようにできていると述べた。また、自他の通じ合い方のタイプとして、同じ型で感応しあう「同型性」と、相互にやりとりする「相補性」の 2 つを指摘した。また相互のやりとりは「関わる・関わられる」ことから成立するので、「受動・能動関係」から構成されるとした。そして、これらを基本としながら、自他関係の成立過程や、他者の存在や他者とのやりとりを前提として形成されていく「自我」について考察した。

浜田が述べたことを、「巣と群れ」という枠組みと関連づけて考えてみよう。自他関係の本質を育成させる「巣」では、同型的感応を媒介としながらも、それを通してやりとり関係を形成していくという意味で、受動・能動関係を前提とした「相補性原理」がより優位になる。しかし共に帰属集団内で活動する「群れ」においては、メンバーとの自他関係をベースにしながらも、共に同様の活動を行うという意味では「同型性原理」がより優位だということができる。

「巣」と「群れ」とでは、それぞれにおける人間関係を支配する関係性の原則が大きく異なる。筆者は、そのことが端的に認められた障害幼児の事例を経験したことがある。「巣」と「群れ」の違いを素描するためにまず紹介したい（柴田・吉村、1992）。

歩行を獲得した知的障害のない脳性マヒ男児 A（以下 A 児）が幼稚園に通い始めた頃、幼児集団の中で「アホ」と言われたことがあった。A 児は「アホ言うものがアホだ」と言い返した。この A 児の返答は、A 児を慈しみ育ててきた母が常々 A 児に話していたことであったが、年上の他児からは「アホ言われるものがアホだ」と言い返されてしまった。A 児は帰宅して母にこのことを話し、母からは「そうではない」との慰めを得たが A 児は意気消沈し、その後しばらく尾を引いた。

このエピソードは、「巣と群れ」との関係性の原則を端的に示していると思われる。親子関係の中で、A 児は母に受け止められて「巣的世界」の中で安心感が形成され、他者との関係性を学んでいた。そして母から離れて「群れ社会」に初めて旅立っていった時に、そこで出会うのは、受け止められ、安心感が与えられる人間関係ではなく、「アホ言われるものがアホ（弱い者は弱い者）」という力関係の原則であったのであろう。弱い者は弱い者のポジションを引き受けた上で、集団が求める上下関係による準拠枠につき従っていかないと、集団参加できないという厳しい局面に立たされた。

しかし幼稚園の年長児の頃には、A 児にも親

しい友人ができた。秋の運動会の前頃に、A 児は友人と一緒に「徒競走遊び」を楽しんだが、スタート地点にハンディを設定して走行距離に差をつけるという競走ルールを 2 人の合議で設定し、「その上で、ゴールは真剣勝負だ」と語り合って勝負したという。「群れ」の中での仲間関係の形成や社会性の芽生えは、A 児の場合にはこのような形で結実していった。

集団参加による社会的な人間関係形成の端緒となる幼児期には、それぞれの「巣と群れ」との往還を経て、大なり小なり A 児の事例で述べたような成長プロセスを経験するのであろう。マターナル･デプリベーションの研究を行った Bowlby（1969）は、人間の心の絆を形成する根幹として、有名なアタッチメント理論の研究を行った。彼が述べた愛着行動の 4 つの発達段階は、乳幼児の「巣」の形成においては重要な要素となる。しかし、愛着形成をベースとする理論や臨床的方法は、不適切な親子関係下にある場合の診断やケアに対しては有効ではあっても、「愛着人物との分離」や「愛着対象喪失」の研究へと向かう Bowlby 理論は（中野、2017）、親子関係（とりわけ母子関係）へのウエイトが強すぎるように思われる。乳幼児期の人間関係の発達を考えるためには、アタッチメント理論を包摂しながらも、子どもの生活世界の構造を「母子関係対外界」といった構図で捉えなければならない。その上で、子どもがなぜ外界に向かおうとするのか、そこではどのような関係構築がなされるのか、仲間・集団・社会性などについての発達をどう捉えるのかなどについて検討し、「巣と群れ」の間を往還しながら形成される幼児の人間関係について、段階を追った相対的な検討が必要であろう。

3 「巣と群れ」を準備する前提としての乳児期

本稿は、おおよそ 1 歳半以降の子どもの人間関係についての検討が主目的であるが、このことを検討する準備として、乳児期についてまず俯瞰しておきたい。

水谷ら（1979）は、生後 20 時齢の新生児に対して、対面してゆっくり口の開閉する動作を見せた時に、口の開閉動作等の模倣が見られることを報告したが、Bowlby（1969）によれば愛着形成の第 1 段階にあたり、それらの行動は本能的なものだとされた。筆者らが行った 3 名の乳児の VTR 観察（1978､未発表）においても、生後数日の新生児に口の開閉動作が観察された。しかし、この動作は相手を受け止めて模倣するといった行動だとは見えず、曖昧だがいつしか両者が同時に動いているといった印象であった。内田（2009）は、このような模倣対象への意識が曖昧な動作を、「同期（synchrony）」という概念で説明している。これらは生後 3 ヶ月までにほとんど消失したが、他者（あるいは外界）と同期的に生じるこの「口の開閉動作」という行動様式も、曖昧ではあっても他者との「同型活動」と呼ぶことができるのならば、ヒトは「同型活動」を取る（取ることができる）存在として生まれてくることになる。

この「同型性」を集団性（ひいては社会性）の本質を成す活動様式であると規定するならば、生まれたときから、ヒトは他者（社会）との関係に否応なしに組み込まれた存在として生まれてくることになり、これが社会性の起源であるかも知れない。同様の口の開閉模倣実験を行った池上（1988）によれば、1 か月児の原初模倣は対人的条件に関係なく出現するという。

特定の他者との関係活動は、「やりとり」に代表されるように、自他で一対となった「相補

的活動」である。また「関わる・関われる」といった「受動･能動関係」を内包する（浜田、1992）。筆者らのVTR観察では、生後2か月頃に他者が声を掛けて乳児に接近すると同時に乳児も声を出し、しかも他者が存在している状況では息づかいが荒くなり、あたかも興奮しているような状況が観察された。また別の乳児では、他者が接近すると声を出しながら、口唇を緊張させて、人がそばにいる間だけ上唇が「富士山のような形」になる事を観察し、あたかも「対人的な表情を作り出している」のような印象であったが、3ヶ月児の他者へほほえみかける（Spitz、1965）ような、はっきりと他者へ向かうような活動ではない。

これらは、自他の区分が明確ではなく、特定の他者との関係でもないので、いわば外界に存在する人と乳児自身が混淆したような状況で生じる相互活動である。しかし、新生児の口の開閉のような「同期活動」とは異なり、ここでは他者に関わり他者から関われるようなことが、やりとりとはいえない自他混然一体化したような形で生起している。このようなやりとりを非常に曖昧な「受動・能動的な状況」ととらえるならば、それらを「相補的活動」の萌芽ということができないか。生後3ヵ月間の変化の中に、他者に向かう活動のはじまりを見て取ることができよう。

上に述べた生後3ヵ月間の成長過程は、個体の機能としてはきわめて未成熟な新生児であっても、外界（＝社会）に向かって感応することをまず前提としながら、その中で他者が身近に存在するような状況では、否応なしに対人関係の基本となる「受動・能動関係」が混然一体となった、自他混淆したような相互活動的な状況が生じる。そしてそのことを踏まえて、生後3ヵ月の「ほほえみ」のような乳児からの他者志向的活動へと結実していく。同時に曖昧な社会との同期活動である「口の開閉模倣」は見られなくなっていく。この経過の中に、子どもはその生活世界において、否応なしに「巣と群れ」を生きていく原型的なフレームをすでに有しているように思われる。「口の開閉模倣」のような「原初的群れ活動」を契機としながら、生後3ヵ月頃に見られ始める他者志向的活動は、大人である養育者との関係を中心に発達し、その後そこで営まれる「受動･能動的対人関係」によって、確実な愛着関係が形成されていく（Bowlby（1969）の愛着形成の第2段階に相当）。

4　模倣活動に着目して

乳児期後期の対人関係の特徴を眺めると、他者とのやりとり、特に物を介して人とのやりとりを共有する「三項関係」が活発化し（浜田、1992）、それを通して特定の他者との愛着関係が急速に深まってくる。「巣的活動」の充実と言い換えることもできよう。同時に受け止めることのできる外界が急速に拡大し、外界で生じている様々な事柄に同期するように「同型的活動」を取ることもまた、身体能力の向上と共に活性化してくる点にも着目したい。しばらくは、「群れ的活動」はこのような内容で外延化される。

このような成長の中で、幼児期の人間関係へとつなぐ掛け橋として、次に重要な意味を持つのが「模倣活動」であろう。浜田（1992）は、模倣について、上に示したような「三項関係」において、とくに同型的側面が単に受容・了解にとどまらず、能動の関係として前面に出たのが模倣であると述べている。本稿では、模倣活動そのものではなく、幼児期後期の集団参加に至るまでの過程において、模倣活動が果たしている役割とそこでの発達的変化とその意味に焦点を当ててたどり直してみたい。

麻生（1987 : 1992）は、長男の生後 11 ヶ月から 20 ヶ月時点での模倣活動などの行動観察を行った。最初の頃は即時模倣など、単に相手の示す行動を同じ動作でなぞる、いわば「行為の共同化」のレベルであった。しかし後には、自他の関わりを通して相手が関わっている対象世界への行為の全体を自らも取り込んでまねて行うような、いわば「対象の共同化」というレベルへ変化することに着目した。1 歳 6 ヶ月の頃から出現する「遅延模倣」もこの結果であると解したが、関わりを共有化する際に存在している自己と他者の「同型性」への気づきがその契機であるという。そのことで実に様々な他者のしぐさを急速に模倣しようとするようになる。そして、このような「対象の共同化」のプロセスは、子どもが「自己と他者との同型性」を認識していくプロセスでもあり、そのことを通して関わりの中での自己と他者との相補的な役割関係を交換できるようになる。このようなプロセスによって、自らの内側に「眼前の他者のまなざしが理解できる」という「内なる他者（他者性）」が成立しはじめ、2 歳期に見られる「役割交代遊び」につながっていくのだとする。更に興味深いのが「対象の共同化」が明確になり始める 1 歳 7・8 ヶ月頃から、取り込むべき行為が余り明瞭ではない同年齢児が、自分の鏡像的な他者になり始め、対等な他者として同年齢児に急接近し始めるという。

麻生が述べた同年齢児への急接近を換言すると、同型性を原理とする一方的な「群れ行動」が急に大きく拡張される時期であるといえるだろう。

5　幼児期の仲間関係を構成する諸側面

特定の大人との関係を通して「他者性」が芽生えて相互関係が深化し、これと並行しながら同年齢児と同じ格好（同型性）を取りたがるように急接近し出す 2 歳児は、大きな発達の転換点であろう。「巣と群れ」の意味が急に明確になる時期であり、愛着理論でいう安全基地の成立や、そこから外界への探索行動が活性化しだし、「安心感の輪」の持つ意味が明確になり（北川、2013）、並行遊びが活性化する時期である。

横浜（1980）は 18 ヵ月頃から他児に対して「相手を自分の仲間とみなして見つめる・触る・協力する」という正の反応が見られるようになり、それが 24 ヵ月以降に活発になると述べた。また砂上・無藤（2000）は、他者と同じモノを持つことが、仲間入りの方略および仲間意識の共有として他者と同じ動きをすることの一部をなすとしている。また、モノを介さなくても砂上・無藤（1999）は幼児にとって仲間意識という心理的な共同性は、他児と同じ動きをするという身体的な共同性に他ならないことを示している。

模倣行動に着目した倉畑（2016）は、幼児の模倣行動における「模倣する・される関係（受動・能動関係）」に着目し、幼児同士の二者関係においてこのような模倣関係が、関わりの中で逆転して関わり返すことができた時に、相互交渉は可能となりはじめるという。身振りの受動・能動関係の逆転は 30 ヵ月以降に可能となり、二者のコンタクトが開始されていく可能性を指摘した。このことは、幼児集団に向かう際の活動は、30 ヵ月以降では麻生（1987）が述べた「自分の鏡像的な他者としての同年齢児への同型的接近」とは異なる質の他児を関係対象として意識した関わり（認識）が開始されることを意味する。

第一次反抗期を迎える 3 歳頃は、Wallon の自我形成論流に言えば、「内なる他者」の成立によって、他者との関係を前提に自分の中で「私」が成立してくる時期である（Wallon、

1983)。このことによって他者との基本的な関係形成の場である「巣」における営みは更に変化し、ここを基盤に他者として意識された仲間関係を通して、大きく「群れ」へと向かっていく時期でもある。

3歳児以降の仲間関係に関する研究の動向を多面的視点でまとめた高櫻（2006）の研究は興味深い。高櫻は、仲間関係を「同年齢他者との相互作用によって築かれる関係」と捉えた上で、相互作用のレベルによって、「(同年齢児における）二者間」「集団内」「相互作用が上手くいかない場合」の3つに大別して捉えようとした。

まず二者間に関して、柴坂・倉持（1998）はある女児に着目し、2年間の幼稚園生活の中で、どの子どもに対しても同じ程度に関わるのではなく、「安全基地となるようなクラスメートを持つ」ことを明らかにした。筆者が保育所での自由遊び場面の様子を観察した時にも、男女を問わずやりとりや共同での意志決定などを行いながら、二人がペアになって集団遊びの場に参与することがことのほか多いのをよく見かけた。高櫻は、幼児期の仲間関係は、二者間での関係形成を基盤とした上で集団内での相互作用に発展していき、遊びなど日常の様々な経験を通して「親密性」のある二者関係を形成していくと述べている。

仲間との相互作用のきっかけを検討した松井他（2001）の研究によると、3歳児に模倣が多く見られるがこれは相互交渉に用いるわけではなく、同じ行動をすることで仲間と一緒にいる状態である。しかし、やがて模倣行動は相互交渉の中で機能するようになると共に、3歳児よりも4歳児において「入れて」といった明示的な仲間入り方略を使用することが明らかになるという。更に4歳児前後の幼児は、間接的な言い回しをしたり、進行中の自分の活動を仲間に示すような、仲間を意識した相互作用としての暗黙的な方略が増加することに着目した。このような行動に対して仲間からの即答はなかなか得られないのだが、一見すれ違った相互交渉の時期を経て、4歳児後半には仲間を自分の活動へ誘い入れたり、自分に注意を引きつけることが増加するという。また瀬野（2010）によれば、遊びの中での相互模倣は、「一人が開始した遊びが他児を巻き込んでいく相互模倣」と、「コンタクトの成立を確認するための相互模倣」の2つのタイプがあることを示した。砂上・無藤（1999）は、他者と同じ動きをすることが4・5歳児になっても幼児同士をつなぐ重要な機能を保持しているということを指摘したが、これは「群れ」が有する同型性原理に関する叙述である。

謝・山崎（2001）は、友達集団における優勢順位が集団内の社会的行動を制御する働きは3・4歳ごろすでに現れ、集団全体の活動は優勢順位の上位の者を中心に行われることを示した。また中澤（1992）は、集団内でポジティブな相互作用を多く行った子どもほど、集団内において高い社会的地位評価を受けることを示した。これらは「群れ」における力関係の原則を表しているように思われる。幼児の仲間集団はこのような全体力動を持ちながら、その中で「二者関係構造」による相互交渉を有する幼児の束が輻輳し合いながら、年齢に応じた仲間関係を形成していくのであろう。その上で、廣瀬他（2006）が述べている「3・4歳では遊び相手は偶発的でその場にいたかどうかの近接性重要な要因であるのに対して、5歳では偶発的な相互交渉によらず、興味や関心の類似性によって遊び相手が選択される」という変化を遂げていき、「関係の共有化を生きる群れ」へと変化しはじめていく。そして、このような生活世界を生きる幼児の背景には、更に安全基地として、「巣」としてのポジションをとる親や保育者が存在

し、それらの支えによって幼児の仲間関係が成立しているのであろう。

6　保育士による幼児の集団参加に対する評価からの検討

ここまでは、先行研究による幼児期の人間関係の受け止め方について述べてきたが、保育現場の保育士はどのような受け止め方をしているのであろうか。筆者が作成した子どもの社会生活能力を評価する「社会生活能力目安表（以下、目安表）」の改訂のために、0 歳から 6 歳までの乳幼児 106 名についての評価を、保育所担任保育士 20 名に依頼した（柴田、2017）。

目安表は、身辺自立・移動・作業・意志交換・集団参加・自己統御の 6 領域から構成されているが、本稿では保育士による集団参加領域に対する評価結果に着目する。集団参加領域における乳幼児期の評価課題を示したのが表 1 である。表 1 に示した各課題は、各年齢区分のおおよそ 80% の子どもが達成できることを前提に構成しており、各課題を通過する毎に 1 点を付与して評価素点を算出した。

担任保育士が評価した結果を、子どもの年齢区分毎に示したのが図 1 である。乳幼児 106 名の平均評価素点を、3 ヵ月毎の月齢（例：11 ヵ月～ 13 ヵ月の子どもの月齢を 12 ヵ月として集約）間隔で示している。また図中の直線は、各月齢毎に評価されるべき予想平均素点を示している。

保育士が行った評価結果は、図 1 に見られるように、ある月齢区間では、予想評価素点を大きく上まわっていた（特徴的な区間を A ～ D で図中に示している）。評価乳幼児数が少ないので、明確に言い切れないが、予想直線とのずれは担任毎の評価誤差なのか、あるいは特徴的な月齢区間に乳幼児の集団参加に関する高評価につながる事実（発達的意味）があるのかについて検討する必要がある。比較のために、身辺自立領域における同様の評価結果を図 2 に示したが、集団参加領域のような明確な特徴は見られなかった。

A ～ D のおおよその月齢区画を示すと、A は 18 ～ 30 ヵ月頃、B は 42 ～ 51 ヵ月頃、C は 54 ～ 63 ヵ月頃、D は 66 ～ 75 ヵ月頃に相当する。まず A を見ると、保育士はかなり高い評価をし、予想到達課題の 3 ランク上（最高で 3:6 水準のごっこ遊びへの参加まで）に対して「できる」と評価している。しかし、33 ヵ月以降になると、急に標準到達直線のあたりに戻るのはなぜであ

表 1　集団参加領域の評価項目

No.	年齢区分	集団参加
1	0：6	人から働きかけられると自分からも嬉しそうに反応する
2	1：0	拍手などの身振りをまねる
3	1：6	体操をまねて、リズムに合わせ、手・足・体を動かす
4	2：0	同じ年齢の子どもが集まっているところに関心を示し、近づこうとする
5	2：6	誘われると仲間に入る
6	3：0	クラス集団の中で、皆と一緒に歌が歌える
7	3：6	ままごとなどのごっこ遊びで役を演じる
8	4：0	運動会などで、リズムに合わせて、皆と一緒にお遊戯や踊りなどができる
9	4：6	ブランコなどの順番を、自発的に待つことができる
10	5：0	じゃんけんで勝ち負けがわかる
11	5：6	劇で、簡単なせりふを演じることができる
12	6：0	ドッジボールや鬼ごっこなどの集団遊びに、ルールを理解して参加することができる
13	7：0	トランプ、カルタ、すごろくなどの簡単なゲームで、ルールを守り、友達と仲良く遊ぶことができる

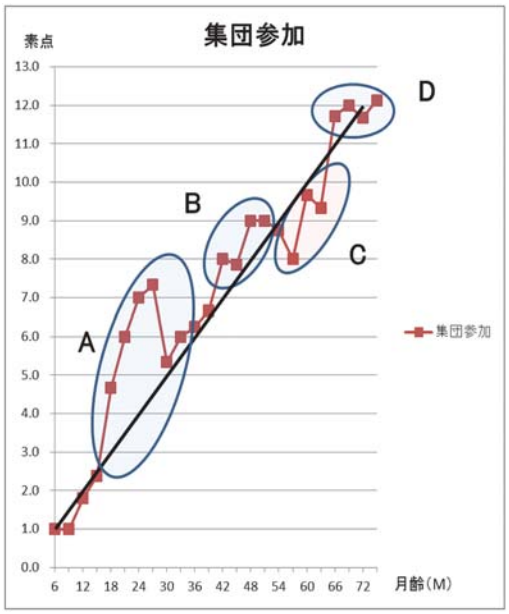

図 1　集団参加領域における年齢区分別得点

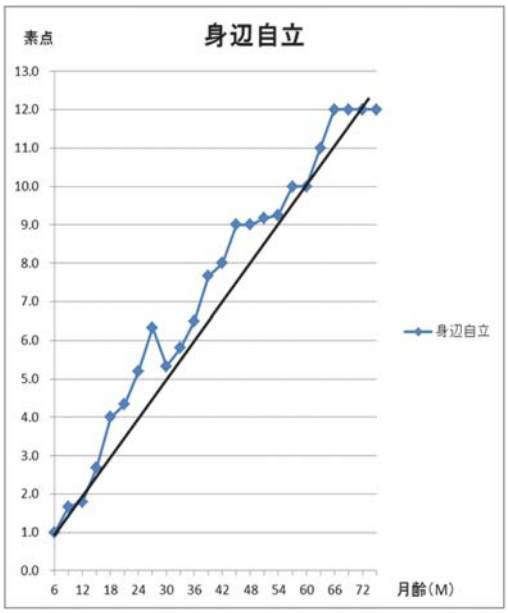

図 2　身辺自立領域における年齢区分別得点

ろうか。この月齢区間は、麻生（1987）が述べた「取り込むべき行為が余り明瞭ではない同年齢児が、自分の鏡像的な他者になり始め、対等な他者として同年齢児に急接近し始める」時期に合致する。換言すると、とにかく外界の他児に向けた「同型的」な活動を活発に開始する時期なのであろう。表 1 の No7 までの課題が求める相互交渉的な内容はクリアしないのだが、課題が示している行為そのものについては、とにかく集団に向かって動き出し、とにかく目前の集団と同じ事を一方的に何でも行いたがる時期ではないか。そして保育士にとっては、幼児のこの変化に対して、「＊＊＊のようなことまでしようとする」という部分に焦点を当てて受け止めた結果が高評価につながったのではなかろうか。このような曖昧だが強い群れ志向は、同時に巣である担任保育士との往還によって支えられるであろうから、安全基地である保育士にとっても、当該幼児の外界志向がより強いインパクトになるのも高評価の背景になったのだろう。

A と B の間は 3 歳前後であるが、この時期の保育者の評価は急に下降している。A の時期のように、子どもがむやみに他児に対して同型的に動かなくなったことが想定されるが、この時期は「内なる他者」が成立し、倉畑（2016）が述べた「身振りの受動・能動関係の逆転」開始される時期である。外界で出会う他児が、鏡としての同調対象から相互交渉を行う「他者」へと変化するのであれば、A のような闇雲な同型的行為の企図は減少するだろう。目安表が求める関係の内容が正当に評価され、目安表の課題 No.7（3 歳 6 ヵ月水準）の「ごっこ遊びで役割を演じる」という遊びが他児との間で十分にできることが、この時期の到達課題となる。

B は 4 歳前後の時期であるが、この時期に保育士の評価は若干高くなり、「相互交流しながら共に遊びたい」という意識の高まりが評価に反映されたのであろう。仲間形成に向けて高櫻（2006）が述べた集団の中での「二者関係」へ

の志向がはじまり、松井他（2001）が述べた仲間入りの方略が動き始める時期でもある。他方ではおそらく「群れにおける力関係の原則」にぶつかり、それを受け入れなければならないのもこの頃からであろう。安定基地としての保育士の役割は、A では子どもの存在そのものを受容する事で十分であったが、B では仲間関係を営もうとする子どもを（関係を含んで）受け止めなければならない。

C は 4 歳後半の時期であるが、B で開始された仲間関係の充実を図る時期である。個々の幼児によって、仲間入りや二者の親密性の形成の度合いに差が見られること（個性と言えるかもしれない）などが、全体としては評価の低さに反映されているのであろう。目安表の課題 No.9 の「ブランコの順番を、自発的に待つことができる」ことが、この時期を通過できる目安になる。保育士は、群れの様子や群れでの出来事を見ながら、個々の子どもに応じた受け止めにより一層配慮する必要があり、そのことがそれぞれの子どもにおける仲間形成の育成に資すると考える。

D は年長児の時期である。5 で述べた仲間関係が完成する時期であり、「二者の親密性」と「仲間関係における営みの内容」が相互に輻輳しながら、「仲間関係を営む群れ」として機能し始める。この時期の到達目標は、課題目録 No.12 の「ドッジボールや鬼ごっこなどの集団遊びに、ルールを理解して参加することができる」ことである。この時期の安全基地としての「巣機能」はやや複雑である。まず群れの中に存在する「二者の親密性」が個々の安全基地となるが（高櫻、2006）、他方で「二者関係」が群れ全体の調和・規範・凝集性などに作用したり、あるいは「二者関係」そのものが群れの力・序列の根源となって群れ全体に正負の影響を与える。さらに複数の「二者」間の関係性によって、群れの力構造が規定される。このような「巣と群れの二重構造」を示し始め、群れ活動はダイナミックなものになっていく。そしてこのような変化が、学童期における仲間関係へと発展していく基礎になると考える。保育士は、個々の子どもの安全基地になると共に、群れ全体や群れ内の複数の「二者」の安全基地にならなければならない。保育士が群れ全体に上手く関与できた時には、子ども自身の能力の成長と相まって、様々な集団活動を展開することができよう。

7　考察

「巣と群れ」は子どもの生活世界を構成する「場」である。これまで、幼児期の人間関係について、「巣と群れ」という枠組みに沿って俯瞰してきた。また「巣と群れ」の全体を把握するために、対人行動様式として「同型性」と「相補性」という 2 つの様式を提示し、「相補性」を形成する関係様式として「受動・能動関係」に着目した。更に、人間関係を個人内（intra personal）・個人間（inter personal）・社会内（inner social）の 3 つの次元の複合として全体的に捉えていくことが大切であると述べた。そして、自他混淆状態にある生後 3 ヵ月間に、すでに上に述べたようなことが全体的に輻輳して関係構造を形成しはじめており、これらがその後の「巣と群れ」を生きる子どもの生活世界の基本構造として寄与するであろうと述べた。

これ以降の人間関係の発達を、個体発達の観点から見ると、Wallon が述べた「混淆→融即→自他同一性→自我同一性」（Wallon、1983）という自我形成上の流れに従って、「巣と群れ」を生き、両者を往還する子どもの人間関係の取り方が変化していく。しかし、ここで「個の成立→集団関係の成立」といった単線的・一方向的な発達のとらえ方をしてはならず、子どもの

各発達段階において「巣と群れ」は常に相互補完的な全体として捉えなければならない。例えば「愛着形成」や「愛着障害」などを考える場合に、常に二者関係の外側にある外界や社会と関係づけて了解していかなければならないと考える。どのような子どもの変化が、どのような行動の開始を準備しているのかということを、幼児期では特に相対的に見据えていかなければならない。

図 1 で示した A ～ D の各段階に示した特徴から、幼児期の仲間形成の段階を大づかみに了解することができる。同型性の優位な A の時期を「無差別な群れ志向期」、他児への関わりを求め始める B の時期を「仲間としての群れ志向期」、二者の親密性を基盤としながら仲間関係を生きる D の時期を「仲間関係を生きる群れ活動期」とでも呼ぶことができよう。以上の 3 つの段階をへて、幼児期の仲間関係が成熟していき、学童期以降の仲間形成を準備する。9 歳以降に成立するとされる「他者の立場に立った共感・理解」の芽は、D の時期に見られる群れの中での異なる二者関係同士のぶつかりや、折れ合いや、受け入れ合いの中に垣間見ることができるのではなかろうか。

A ～ D は、「群れ」における人間関係を指標化するが、これらを支える「安全基地（Secure Base）」としての「巣」についても同時に押さえることが大事である。大人・子ども関係の中で培われる「受動・能動関係」を育てる「相補性」が、仲間関係の深化のための様々な場面での「相互交渉能力」をどのように育てていくのかについて、着目することが大事である。しかし Secure Base の形成は「二者関係」の中だけではなく、個体発達・成熟の実現や各機能間のバランスが確保された時、あるいは D で述べたような集団内での「巣と群れとの二重構造」が上手く機能するような場合は、いずれも子どもが生活世界を生きるための Secure Base となりうるのであろう。「安全基地」の形成と確保は、個人内・個人間・社会内のそれぞれで果たされなければならない。

「巣と群れの往還」や、各時期に見られる強い「群れ（仲間）志向」は、人が生得的に有していると思われる「同型志向」の強さによって支えられているのだろう。人間は良くも悪くも元来社会的存在であり、それは大人になるまで続く。例えばライブコンサート会場で、ファンが立ち上がってミュージシャンと共に立ち上がって同じ振り付けで踊り出すような場面などが想起され、そのことによってそこに集う人たちは強い連帯感のようなもので結ばれる。このようなことが幼児期にもよく見られる。

幼児の仲間関係を育成する保育者は、これまで述べた幼児の人間関係の変遷の様子をよく理解しながら、発達段階に応じて、あるいは子ども毎の個性や担当する群れの TPO 等に応じて、臨機応変に対応する必要がある。安全基地としての保育者の役割は、個々の子どもだけではなく、群れ全体の安全基地であり、そのことで仲間関係の形成を活性化させる。さらに保護者に対する安全基地としての役割をも担い、子どもが憩う「巣」を安定化させる。では図 1 で見られた、ある時期の幼児に対する保育者の過大評価傾向をどう見ればよいだろうか。サンプル数が少ないため、保育者の普遍的傾向であるとは言い切れないが、子どもが示す表面上の活動（その時々の活動）に対して、心情も含めて養育者が同一化しやすいからなのであろうか。その時々の子どもと共に生活するのが保育者であるのなら、保育者としての熱意が評価に対するバイアスになっている可能性がある。時間変化の中で子どもの変化を客観的に捉えることができるような発達的視点が保育者に求められる。

8　おわりに

本稿の中で触れることのできなかったいくつかの点がある。まず、本稿で扱った人間関係行動を取ることができる条件として、個体機能の成熟がある。幼児期は未成熟な時期であるので、人間関係の発達の経過を個体成熟と関連づけて眺める必要がある。

幼児期後期の親、家族、兄弟、近隣などでの人間関係についても着目する必要がある。幼児期後期はこれらの人間関係も大きく変化する時期であり、仲間関係の変化とは異なった「巣と群れ」の変遷があるように思われる。特に 3 歳以降の親子関係の変遷について、仲間関係の変化と併せてみていく必要があろう。自己統制能力の観点から人間関係を考察する必要もある。自己統制能力は、仲間集団だけでなく、上で述べた様々な人間関係からも学んでいく。

本稿では、同年齢児集団での変遷を主に取り扱ったが、異年齢児で構成される仲間関係や、仲間における群れの関係力動の様子、あるいは集団内での序列の上下による仲間形成の方略などは、同年齢児集団とは異なり、異年齢児仲間の年齢等との構成条件によっても大きく異なるのであろう。異年齢児で構成される仲間関係における「巣と群れ」についての考察も今後の課題である。

幼児の豊かな人間関係を形成するために、現在多くの自治体等で幼児教育（保育）のカリキュラムが設定されているが（高松市、2011）、育ちの到達目標として尊重しながら、本稿で述べたような子どもの生活世界での人間関係の実態と絶えず照合するような実践を展開することが、豊かな幼児の育成につながると考える。

引用・参考文献

・麻生武.（1987）. 行為の共同化から対象の共同化へ：生後 11 ～ 20 カ月における乳児 N の "人" としての成長. 相愛女子短期大学研究論集 34.（pp.87-135）.

・麻生武.（1992）. 浜田寿美男（編著）「私」というもののなりたち：第 3 章すみやかに私が「私」になっていく子どもの事例から.（pp41-66）. ミネルヴァ書房.

・Bowlby J.（1969）. Attachment and Loss Vol.1 Attachment. London Hogarth Press. 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子（訳）. 母子関係の理論①愛着行動. 岩崎学術出版社.

・浜田寿美男（編著）.（1992）.「私」というもののなりたち. ミネルヴァ書房.

・廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘.（2006）. 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係. 心理学研究第 77 巻第 1 号.（pp.40-47）

・池上貴美子.（1988）. 乳児期の口の開閉と舌出し模倣に関する対人的条件の検討. 教育心理学研究第 36 巻第 3 号（pp.192-200）.

・北川惠.（2013）. アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し. 発達心理学研究第 24 巻第 4 号.（pp.441-448）.

・倉畑（大桑）萌.（2016）. 幼児期における模倣の社会機能. 奈良女子大学博士論文甲第 595 号.

・松井愛奈・無藤隆・門山睦.（2001）. 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討. 発達心理学研究第 12 巻第 3 号.（pp.195-205）.

・水谷宗行・金子伸子・鈴木葉子・後藤美代子・野村庄吾・岡本夏木.（1979）. 新生児の行動の発生的機序（1）：生後 72 時間内の慣化現象および共鳴動作について. 日本教育心理学会総会発表論文集 21（0）,（pp.154-155）.

・中野明徳.（2017）. ジョン・ボウルビーの愛着理論－その生成過程と現代的意義－. 別府大学大学院紀要第 19 号.（pp.49-67）.

・中澤潤.（1992）. 新入幼稚園児の友人形成：初期相互作用行動，社会認知能力と人気. 保育学研究.（pp.98-106）.

・瀬野由衣.（2010）. 2 ～ 3 歳児は仲間同士の遊びで

いかに共有テーマを生み出すか：相互模倣とその変化に着目した縦断的観察．保育学研究第 48 巻第 2 号．(pp.51-62)．
・謝文慧・山崎晃．(2001)．3，4 歳男児の友達集団の特徴：個人行動及び二者関係と優勢順位との関連．発達心理学研究第 12 巻第 1 号．(pp.24-35)．
・柴坂寿子・倉持清美．(1998)．園生活の現実としての仲間と仲間文化−ある幼稚園児の事例から−．子ども社会研究 5．(pp.109-123)．
・柴田長生･吉村夕里．(1992)．浜田寿美男(編著)「私」というもののなりたち：第 9 章被膜のなかの自我と被膜を破る自我．(pp239-260)．ミネルヴァ書房．
・柴田長生．(2006)．子どもの社会生活能力評価について　～標準化された評価尺度の試作と、知的障害児への評価から見えてきたこと～．発達 106 号 (pp.74-88)．ミネルヴァ書房．
・柴田長生．(2013)．子どもの社会生活能力評価に関する検討　～「社会生活能力目安表」の信頼性・妥当性に関する追加検討～．京都文教大学臨床心理学部研究報告第 5 号 (pp.3-23)．
・柴田長生．(2014)．知的障害児における社会生活能力の評価について 1　～社会生活能力目安表による評価の意義と妥当性について～．京都文教大学臨床心理学部研究報告第 6 号 (pp.13-37)．
・柴田長生.(2017).社会生活能力目安表改訂への試み．京都文教大学臨床心理学部研究報告第 9 号(pp.37-48)．
・Spitz. R.A.(1965)．古賀義行訳．母−子関係の成りたち．同文書院．
・砂上史子・無藤隆．(2000)．保育における身体性 (2)−子どもか他者と同じ物を持つこと・使うことと仲間関係−．日本保育学会第 53 回大会論文集．(pp.54-55)．
・砂上史子・無藤隆．(1999)．子どもの仲間関係と身体性−仲間意識としての他者と同じ動きをすること−．乳幼児教育学研究 6．(pp.75-84)．
・高松市・高松市教育委員会．(2011)．年齢別共通カリキュラム．高松っ子いきいきプラン．(pp21-28)．
・高櫻綾子．(2006)．幼児期の仲間関係に関する研究の動向．東京大学大学院教育学研究科紀要第 46 巻．(pp.259-267)．
・内田伸子．(2009)．愛着．指導者向け資料「乳幼児期を大切に　子供の発達の科学的知見と親の学習支援Ⅱ− 1」．東京都教育委員会．
・Wallon. H.(1983)．浜田寿美男訳編．身体・自我・社会．ミネルヴァ書房．
・横浜惠三子．(1980)．保育所児における仲間関係の発達に関する研究．幼児と教育 79.(pp.48-57)．

Abstract

A Study about the Process in the Formation of Human Relations in the Infancy: From the Viewpoint, “ the Gathering Group and the Nest ”

Chosei SHIBATA

The child achieves growth and ripeness as the individual. And on the one hand, in the babyhood, attachment n is formed, in the infancy, a basic interpersonal relationship is formed and a secure base is formed, in the later childhood, mutual sympathy relation is formed by it and the others. (= A behavior system) And on the other, in the babyhood, the outside world is formed, in the infancy, a playmate is formed, in the later childhood, since then, a relationship aggregation, a belonging group, a reference group are formed. (= B behavior system)

If it calls A behavior system “ the Nest ” and it calls B behavior system, “ the Gathering group ”, human relations is formed by the round-trip of “ the Gathering group and the Nest ”. In this research, it considers the future research about the human research of the infant from the viewpoint of “ the Gathering group and the Nest ”. It reviews all together the evaluation result and the considering result of the group participation ability of the preschooler by the child care man which the author did. And it got the following knowledge.

The 1st stage (1:6 - 2:6): The infant aims at the outside group indiscriminately. As for the action of the infant, the synchronic behavior is predominant.
The 2nd stage (3:6 - 4:3): The infant aims at “ the Gathering group ” as the pal.
The 3rd stage (5:6 - 6:3): The infant lives in the brotherhood in “ the Gathering group ”.

From the time when the human being was born, it is the person who exists in the society. And The human being has the function to try to take the operation which is the same as the others. Those features become the motive when participating in the group and the infant wins brotherhood step-by-step. As “ Secure Base ” to run stable brotherhood, “ the feature of the Nest ” is important. While complementing “ the Gathering group and the Nest ” mutually, they function each other.

keywords: The human relations in the infancy., The pal forming, Secure Base, the Gathering group and the Nest